

「歴史文化遺産を考える」

## 契丹（遼）の仏教をたずねて

——二〇一二年度の調査から——

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

（よしだ・かずひ）  
吉田一彦

歴史学を専攻する私は、〈歴史文化遺産〉に接する機会が少なくない。ある一つの歴史文化遺産が研究対象になるとい場合もある。私は、歴史文化遺産をめぐることは、次の二点について考察する必要があると考えている。

一つは、何をもって歴史文化遺産とするかという問題である。過去の遺物の数は膨大であり、無限に存在すると言ってもよい。それらの中から何をどう選ぶのか。また誰がそれを選ぶのか。それは、何を、現在および未来にとって意味あるものとして評価し、価値づけるのかという問題になるから、それを有する集団もしくは個人にとって、自らの価値観、歴史観が大きく反映された選択がなされるということになる。

もう一つは、それらをどのように保ち、どのような姿で伝えていくかという方法の問題である。人間は時間の中を生きる存在であるが、文物もまた時間の中を歩んでいる。過去の遺物の中には、時間の経過の中で、

その姿が大きく変化してしまったり、当初の姿を失ってしまったものが多いこともある。それらをどのように保ち、あるいはどのように「修復」もしくは「復元」していくのかについては、やはりいくつかの考え方があ

る。この課題を考えるにあたっては、日本において、これまでどのような思想に基づいて、歴史文化遺産（日本では「文化財」と表現）が選択（「指定」と表現）され、どのように取り扱われてきたのかについて考察しなければならぬが、あわせて国外ではどのような思想に基づいて歴史文化遺産の保持、修復がなされているのかについても考慮する必要がある。世界の国々や地域には種々の考え方があり、方法があるように思う。

私たちは、科学研究費補助金の交付を受けた研究「東アジアにおける仏教と神信仰との融合から見た日本古代中世の神仏習合に関する研究」（基盤研究（B）、研究代表者吉田一彦、課題番号二一三三〇二四、平成

二一〜二五年度）を実施するにあたり、国内調査および中国、韓国などの国外調査を行ってきた。二〇一二年度は中国遼寧省・内モンゴル自治区の調査を実施した。また、連携研究者によるベトナムの調査も行なった。私たちはそこで多くの歴史文化遺産に出会い、また特色ある保持、修復の姿を見つけてきた。それらは、私たちの研究課題の性格上、近代以前の歴史文化遺産である場合が多いが、近代のものもあるし、また近代と近代以前とが複合していたり、重層的に折り重なっていたりする場合もある。ここでは、まず、私が中国遼寧省・内モンゴル自治区の調査で出会った歴史文化遺産の現況について述べ、次いで連携研究者の佐藤文子氏がベトナムの調査で出会った日本近代に関する歴史文化遺産について述べていきたい。

### 契丹（遼）の仏教をたずねる

アジア東部における仏教文化の展開を考察する上で、近年あらためて注目されているのが契丹（遼）の仏教である<sup>(1)</sup>。契丹では、多くの寺院・仏塔が建立され、歴代の皇帝たちが仏教を信奉し、契丹大蔵経が作成されるなど、華やかな仏教文化が栄えた<sup>(2)</sup>。日本の平安鎌倉時代の仏教を考えると、契丹の仏教との比較

検討や、影響関係を考察することが重要な研究課題になっている<sup>(3)</sup>。

私たちは、中国遼寧省（内モンゴル自治区をたずね、契丹（遼）の時代に造立された寺院、仏塔、遺跡、文物などの調査を行なった。調査に先立ち、藤原崇人氏から、行程や調査対象の状況について、口述および画像にて詳細なる教示を受けた。篤く御礼申し上げる次第である。一行は、吉田一彦、上島享、脊古真哉、佐藤文字、曾根正人、関山麻衣子の六人で、調査対象地は以下の通りである。

二〇一二年九月

七日 瀋陽桃仙国際空港から遼寧省錦州市義県へ

八日 万仏堂石窟、広勝寺（嘉福寺）、奉國寺、錦州市博物館、広濟寺塔、祐國寺

九日 朝陽北塔、北塔博物館、朝陽南塔、朝陽市博物館、赤峰博物館

十日 遼中京大定府遺跡、遼中京博物館、大塔、半截塔、小塔、南門（朱夏門）跡

十一日 林西博物館、金代長城、慶州白塔、祖陵

十二日 上京南塔、遼上京臨廣府遺跡、上京北塔、上京博物館、真寂寺

十三日 瀋陽桃仙国際空港より帰国

広濟寺塔



奉國寺

遼寧省錦州市義県の奉國寺は、遼寧省を代表する古寺の一つであり、現在も多くの人が参詣する寺院である。この寺は、契丹（遼）の時代に創建され、今日に往時の建築、仏像、石碑などを伝えており<sup>(4)</sup>、多くの歴史文化遺産を保持している。国務院から全国重点文物保護単位に、また国家旅遊局から国家4A級旅遊風景区に認定されている。

同寺の大雄殿は、九間五間で、東西四八・二メートル、南北二五・一三メートル、高さ二一メートル（同寺パンフレット『奉國寺』による）の雄大な建築である。内陣には七軀の如来の坐像が安置され、その各像の前方左右に脇侍菩薩の立像（計十四部）が、そして仏壇の東西両端に天部の立像（計二軀）が安置されている。いずれも塑像である。外陣には、東側、西側、背面西側に多数の石碑が安置されている。これらの碑文は

寺の歴史を知る重要な史料になっている<sup>(5)</sup>。

石碑で最古のものは、①金の明昌三年（一一九二）正月旦日のもので、続いて②元の大徳七年（一二〇三）九月吉日のもの、③元の至正十五年（一三五五）六月□日のものである。他にも明代のもの、清代のものがある。これらのうち②には、この寺の創建に関わる記述が見え、そこから大雄殿の成立年は遼の開泰九年（一一〇二）のことだと理解されている（ただしなお検討の必要があるとする説もある、注4竹島論文参照）。

③は「大奉國寺庄田記」なる碑で、東宮郷貢舉人の杜克中の撰。農事は人を養う本であるといい、「寺之美庄在郭西、在水北、在山陽者、所拋不一、會計總得良田數百頃」と寺の庄田についての記述がある。そして、碑陰には、至正十五年時点での殿舎の様相、厨房、菜園、院子、園子、店、浴房の様相、下院の様相、常住庄田の領有状況などが記されており、同寺に「七仏殿九間」があり、その後方に「法堂九間」が、また「觀音閣」「三乘閣」「弥陀閣」「四賢聖洞壹伯二十間」「伽藍堂一座」などがあったことが知られる。ここからこの寺にも「伽藍堂」が存在していたことがわかる。さらに寺が領有する庄田一つ一つについての記述が

変興味深い。

### 仏塔

あるのが貴重である。なお、同行の脊古真哉氏が碑文を観察したところ、「庄」の字体に「荘」という異体字が用いられていることに気づいた。これは、あるいは「荘」の異体字と見るべきかもしれないが、文字の上部はくさかんむりとは見がたく、やまいだれに土と作つてあるように思われる。日本でも、順如（蓮如の長男）がこれに類似した字体を用いた例があり、脊古氏と私は順如の独特の字体に注目したことがあるので<sup>(6)</sup>、この字体がとても興味深く思われた。

内陣には、大型の如来像七軀が横一列にずらりと居並んでいる。石碑には、②に「七仏」、③に「七仏殿」との記述が見えるので、これら七仏の安置は創建当初からのことと理解してよいのだろう。この七仏は「過去七仏」であるという。中尊は毘婆尸仏、そして向かって右、次に左、次いでその一つ外側へという順序で、尸棄仏、毘舍浮仏、拘留孫仏、拘那含牟尼仏、迦葉仏、釈迦牟尼仏が安置されている。これら七仏は、いづれも八角形の台座の上に坐し、背後に光背を有しており、最大の毘婆尸仏は台座・仏身あわせて九・五メートルになるという（同寺パンフレット『奉國寺』による）。契丹（遼）の時代に、こうした過去七仏を信仰の中心とする寺院が建立されたことは大

遼寧省、内モンゴル自治区には、契丹（遼）時代の仏塔が多数現存しているが、今回は広勝寺（嘉福寺）塔、広濟寺塔、朝陽北塔（北魏代成立、隋代、唐代、遼代に修復）、朝陽南塔、中京大塔、同半截塔、同小塔（金代に成立）、慶州白塔、上京塔、上京北塔を実見することができた。これらは契丹（遼）時代の建立、もしくは修復のものであり、注記の一例のみ金代成立である。また、一例を除いて密檐式塔であり、慶州白塔のみが樓閣式塔塔になっている。塔の壁面にはレリーフ（浮彫）で佛像、菩薩像、仏塔、名号、飛天などが描かれており、それが大きな特色になっている。また、地宮や天宮に文物が奉納されている場合がある。では、浮彫の仏像はどのような尊格を表現したものなのか。大原嘉豊氏は、北寧崇興寺西塔（八角塔）を題材に、塔初層の八仏は過去七仏に法身大日如来を加えたものと考えられると指摘<sup>(7)</sup>、これを継承、発展させた藤原崇人氏は、崇興寺西塔、中京大塔、広濟寺塔では、八角塔の各面に金剛界大日如来および過去七仏が南壁から順に右回りに描かれているとした。そして、中京大塔に見ら

れる二層の小塔の浮彫は、その名号から「淨飯王宮生処塔」にはじまり「娑羅林中円寂塔」に至る八大靈塔であることが知られ、それらは右回りに進んで仏伝（釈迦の一生）を表現するものになっていると論じた<sup>(8)</sup>。また氏は、朝陽北塔の地宮の石経幢を検討し、これにも過去七仏および八大靈塔が描かれていることを詳細に論じた<sup>(9)</sup>。これらの研究により、契丹（遼）の時代の仏塔や石経幢には過去七仏に対する信仰が濃密に見られることが明らかになった。

今回の調査では、広勝寺（嘉福寺）の塔は修復中で、塔の周囲に足場が組まれ、ブルーシートで覆われる状態であった。長く続けられている修復事業であるというが、何らかの事情で事業が滞っているものと拝察される。朝陽北塔<sup>(10)</sup>（四角塔）では、塔、北塔博物館を見学後、地宮を見学することができ、その後階上に登って塔の浮彫のある階に至ることができた。そこで遼代の新造だという壁面およびその浮彫を間近に観察することができ、一同大いに感激した。

著名な慶州白塔<sup>(11)</sup>は道遠く、洪水や工事などで道路事情もよくなく、至り着くのに大変苦労した。ようやくたどり着き、眼前の美しい塔を眺めると、ここまで来てよかったという思いが湧き上がってきた。樓閣式

の塔なので複数の層の壁面に浮彫が見られる。その基本は天部の像を描く浮彫、そして小塔を描く浮彫であると思われるが、それ以外にも、二人の僧をペアで描く浮彫、獅子とそれを引く人、象とそれを引く人を描く浮彫、翼をもつ飛天（迦陵頻伽か）を描く浮彫など多彩で文化複合的な意匠が見られ、興味が尽きない。

遼上京臨廣府遺跡では、中国の研究者によって新たな遺構の発掘調査が行なわれていた。遺構は基壇と思われる部分が掘り出されており、上面に礎石のようなものが見て取れた。何の遺構であるのか、いずれ報告がなされることと思うが、楽しみである。

上京南塔も大変美しい塔であるが、防犯上の理由から浮彫が取りはずさずされており、それらは上京博物館にて展観されている。塔にはその代わり

にレプリカの浮彫が取り付けられている。上京北塔（現地案内石による高さ一三・七メートル）では、私たちが訪れた時、地域の女性信徒が一人で、また二人でお参りに来ており、右邊うらして参拝していた。仏塔への信仰が現在に継承されていることがよくわかった。

### 過去七仏

過去七仏は、『長阿含経』（大正一、No.1）巻一の「大本経」に記され、これに対応するパリー本が知られている。そこでは、過去七仏や毘婆尸仏（ヴィパッシン仏）のことが述べられるが、岡野潔氏によれば<sup>(2)</sup>、この経は早く大衆部と上座部が部派分裂する以前に成立していたものであるという。記載内容としては、毘婆尸仏の仏伝と釈迦の仏伝とがよく似ているこ

とが注目され、両仏伝成立の前後関係が論議されているという。岡野氏は同じような仏伝が繰り返し説かれることの意味について考察し、過去七仏信仰と仏伝信仰とは深い関係があることを論じている。また、杉本卓洲氏によれば<sup>(3)</sup>、早くアシヨール碑文の中にコーナーカマナ仏（拘那含牟尼仏）の仏塔についての記述が見え、サーンチー大塔（第一塔）の門柱や欄楯の浮彫には過去七仏が描かれており、過去仏思想が比較的早くに成立していたことが判明するという。

中国では、大原氏によれば、過去七仏信仰は仏教の伝来以来見られる古い信仰だといひ、藤原氏も北涼や北魏の時代からの過去七仏の造像例を指摘している<sup>(4)</sup>。また、隋唐時代の仏書にも過去七仏や毘婆尸仏についての記述が見られる。中国では、早くから過去七仏が知られており、その信仰が存在した。ただ、契丹（遼）の時代にはそれまでになく過去七仏信仰が興隆したように思われる。藤原氏は、インドから中国にわたって活動した慈賢という僧の訳経活動に注目し、彼が漢訳した経典『妙吉祥平等秘密最上観門大教王経』に毘盧遮那仏（大日如来）および過去七仏についての信仰が記されていることに注目した。そして、契丹における



慶州白塔



上京北塔

過去七仏信仰の高まりは、慈賢の訳経活動によるところが大きいと論じている<sup>(5)</sup>。注目すべき指摘だと思われる。

目を同時代の宋に転ずると、「大本経」が説く過去七仏や毘婆尸仏について、法天（伝教大師、？～一〇〇一）というインドから来た訳経僧が、詔を奉わって『仏説七仏経』（大正一、No.2）『毘婆尸仏経』（大正一、No.3）として新しい漢訳を行なっている。法天は、竺沙雅章氏によると中天竺摩伽陀国の人で、北宋の開宝六年（九七三）に『仏説大乘聖無量寿決定光明如来陀羅尼』を漢訳して朝廷に進呈し、瑞拱元年（九八八）に入藏せしめられたという<sup>(6)</sup>。他方、慈賢も藤原氏が指摘したように「中天竺摩竭陀国三藏法師」であったというから、過去七仏信仰はこの時代の中国とインド（特に中天竺の摩竭陀（摩伽陀）国）との文化交流の中で興隆したと見ることができるともされない。

日本ではどうだろうか。最澄『守護国界章』巻上之中に、徳一の論として、尸棄仏、燃燈仏、毘婆尸仏についての言及が見え、義真『天台法華宗義集』にも、尸棄仏、燃燈仏、毘婆尸仏等についての記述が見える。また、源信『往生要集』巻下第六引例勸信に、毘婆尸仏、尸棄仏、迦葉

仏、燃燈仏への言及が見え、同巻中第四止悪修善に、俱留孫仏についての言及が見える。これらより、学僧たちが過去七仏についての知見を有していたことが知られる<sup>(7)</sup>。ただ、そこには過去七仏というよりも、むしろ燃燈仏を含めた過去七仏が登場するように思う。

日本の事例で強く想い起こされるのは、神仏習合に関わる史料であるが、『本朝神仙伝』『沙門日藏伝』に、日藏が松尾社に詣で、「本覚」を知りたいと欲して三七日の間練行念誦したところ、一人の「老父」が出現して、日藏を叱り、声があつて「毘婆尸仏」と言ったという話があることである。これは、松尾社の「本覚」（本地と同義と見てよからう）は「毘婆尸仏」であるとすると話になつており、大変注目される。私の知る限りでは、これが日本で「毘婆尸仏」に対する本格的な信仰が見られる早い例になるように思われる。こうした信仰の受容について中国、韓国との交流という側面から考察していくことは、今後の一つの課題となるだろう。

**博物館**

今回の調査では、錦州市博物館、北塔博物館、朝陽市博物館、赤峰博物館、遼中京博物館、林西博物館、上京博物館を訪れた。広濟寺の地にある錦州市博物館では、錦州市の文物を中心とする展示がなされており、遼代の仏像、舍利子、銀盒、墓誌、板画などを見学することができた。

朝陽北塔に隣接する北塔博物館は、北塔の天宮および地宮から出現した文物や院内出土遺物が展示されており、はなはだ貴重で興味深く、多くの知見を得ることができた。また先にも述べたように、地宮を見学することができ、北魏時代の木塔の台基部分や地宮に安置される石経幢を見ることができた。

朝陽南塔に隣接する朝陽市博物館は最近オープンしたばかりの大型の博物館で、遼河文明展として紅山文化の出土遺物などを、墓誌展として燕・北魏・唐などの墓誌を、また石函や経板（遼晚期）などを見学することができた。こちらも大変充実した展示である。また、仏教金銅造像展として、主として明清時代の小型の仏像を数多く見学することができた。それらは習合的要素を強く持つものが少なくなく、大変興味深かった。

赤峰博物館は赤峰市の文物を展示

する大型の博物館である。ここでは、「日出紅山」として紅山文化の土器や玉器などを、「契丹王朝」として遼代の仏像、仏具、石経幢、印、遼三彩などを、「黄金長河」として元代の文物などを見学することができた。

遼中京大定府遺跡内にある遼中京博物館では、「契丹風雲録」と題して（二階）、契丹王朝成立に至る歴史ドラマが人形で復元されるほか、二階では、墓誌、石碑、石経幢、それに大塔の天宮から出現した文物などを見学することができた。

林西博物館は閉館中であつたが、館長の王剛先生の御好意で次の三点を見学することができた。①「緑釉穿带盤口瓶」（高さ三一・四センチメートル）、②「磚雕飾件」（三四・二×五五・四センチメートル）、③「戒雲蓮弁紋銅鏡」（直径二三・三センチメートル）。このうち②は、慶州白塔の南西約一五キロの石門子にかつて（清代まで）存在した塔の地から出土したものだという。王剛先生は、その後車で私たちが見学を希望した金代長城（残存部分）を案内、解説してくださつた。心より御礼申し上げる次第である。

上京博物館は、入口に耶律阿保機（八七二〜九二六）の像が設置され、館の壁を契丹（遼）の貨幣や迦陵頻伽のレリーフが飾っている。こ

の博物館には、上京南塔の浮彫が取りはざされて展示されており、如来像、釈迦牟尼像、供養人像、道教人物像、飛天像、迦陵頻伽像を間近に見学することができた。また上京北塔の天宮から発現した文物も展示されており、貴重である。さらに祖陵（耶律阿保機の墓）に関する写真資料や神道石犬、神道石翁仲も展示されている。他にも遼代の金銅仏、銅の観音像、象牙雕仏像、印、墓誌、経幢、契丹大字、小字などが並び、大変充実した展示を見学することができた。さらに帳房山遼墓壁画をはじめとして、遼墓壁画が多数展示されており、屋外にも経幢、石碑、石仏などが展示されていて、多くの知見を得ることができた。

これらの博物館の展示から、地域の人々が契丹（遼）の歴史や文化に深い敬愛の念をいだいていることがよく知られた。

## 〔注〕

- (1) 藤原崇人「遼代興宗朝における慶州僧録司設置の背景」（『仏教史学研究』四六一二、二〇〇三年）、同「契丹（遼）の立体曼陀羅——中京大塔初層壁画の語るもの——」（『仏教史学研究』五二一一、二〇〇九年）、同「契丹（遼）後期政権下の学僧と仏教——鮮演の事例を通して——」（『史林』九三—六、二〇一〇年）、同「北塔発現文物に見る11世紀遼西の仏教的諸相」（『関西大学東西学術研究所紀要』四四、二〇一一年）、同「契丹（遼）後期の王権と菩薩戒」（森部豊・橋寺知子編『アジアにおける文化システムの展開と交流』関西大学出版部、二〇一二年）。古松崇志「考古・石刻資料よりみた契丹（遼）の仏教」（『日本史研究』五二二、二〇〇六年）、同「法均と燕京馬鞍山の菩薩戒壇——契丹（遼）における大乘菩薩戒の流行——」（『東洋史研究』六五—三、二〇〇六年）。水野さや「中国・遼寧省におけるいわゆる遼塔の第一層塔身浮彫尊像に関する調査報告」（『金沢美術工芸大学紀要』五五、二〇一一年）。
- (2) 神尾式春『契丹仏教文化史考』満州文化協会、一九三七年（第一書房再刊、一九八二年）。野上俊静『遼金の仏教』平楽寺書店、一九五三年。村田治郎「遼系の仏塔」（『満州の史蹟』座右宝刊行会、一九四四年）。田村實造「慶陵の壁画——絵画・彫飾・陶磁」同朋舎、一九七七年。笠沙雅章「宋元佛教文化史研究」汲古書院、二〇〇〇年、同「遼代

- の仏教とその影響」(駒沢大学仏教学部論集「三一、二〇〇〇年)。京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム『遼文化・遼寧省調査報告書二〇〇六』二〇〇六年。九州国立博物館編『草原の王朝 契丹』図録、二〇一一年。荒川慎太郎他編『契丹「遼」と一〇〜一二世紀の東部ユーラシア』勉誠出版(アジア遊学)二〇一三年。
- (3) 上川通夫『日本中世仏教形成史論』校倉書房、二〇〇七年。同『日本中世仏教と東アジア世界』塙書房、二〇一二年。横内裕人『日本中世の仏教と東アジア』塙書房、二〇〇八年。同『遼・高麗と日本仏教』(『東アジアの古代文化』一三六、二〇〇八年)。磯部彰『遼帝国の出版文化と東アジア』(注2『契丹「遼」と一〇〜一二世紀の東部ユーラシア』)。
- (4) 奉國寺については、関野貞「滿州義縣奉國寺大雄寶殿」(『中国の建築と芸術』岩波書店、一九三八年)。竹島卓一「義縣奉國寺の大雄殿」(『遼金時代の建築と其仏像』龍文書房、一九四四年)。建築文化考察組編『義縣奉國寺』天津大学出版社、二〇〇八年。遼寧省文物保護中心・義縣文物保管所編『義縣奉國寺』(上下) 文物出版社、二〇一一年。
- (5) 碑文の釈文は注4『義縣奉國寺』(下、文物出版社、二〇一一年)による。
- (6) 吉田一彦・脊古真哉「本願寺順如裏書の方便法身尊像(一)」(『名古屋市立女子短期大学研究紀要』五六、一九九六年)。同「同(二)」(同五七、一九九七年)。同「同(三)」(『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』五一、九九八年)。
- (7) 大原嘉豊「朝陽北塔に現れた遼仏教の側面——華嚴信仰を中心に——」(注2『遼文化・遼寧省調査報告書二〇〇六』)。
- (8) 藤原崇人注1「契丹(遼)の立体曼陀羅——中京大塔初層壁面の語るもの——」。
- (9) 藤原崇人注1「北塔発現文物に見る11世紀遼西の仏教的諸相」。
- (10) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市北塔博物館編『朝陽北塔』文物出版社、二〇〇七年。
- (11) 古松崇志「慶州白塔建立の謎を探る——11世紀契丹皇太后が奉納した仏教文物——」(注2『遼文化・遼寧省調査報告書二〇〇六』)。
- (12) 岡野潔「仏陀の永劫回帰信仰」(『印度学宗教学会』論集』一七、一九九〇年)。
- (13) 杉本卓洲「過去仏塔について」(『東北福祉大学紀要』二、一九七七年)。
- (14) 大原嘉豊注7論文。藤原崇人注8論文。
- (15) 藤原崇人「草海の仏教王国——石刻・仏塔文物に見る契丹の仏教」(注2『契丹「遼」と一〇〜一二世紀の東部ユーラシア』)。
- (16) 笠沙雅章「開宝蔵」と『契丹蔵』(同注2著書所収)。
- (17) 大塚紀弘「平安後期の入宋僧と北宋新訳仏典」(『汲古』六二、二〇一二年)によれば、齋然は入宋して様々な仏教文物を請来したが、その中に宋代の新訳仏典があり、それに法天が訳した『仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』『最勝頂陀羅尼経』『七仏讚頌伽陀』の三点が含まれていたという。また、その後、彼の弟子の嘉因と折乾により新たな新訳仏典が請来されたという。